

Title	オーリン著 地域貿易と国際貿易 : Bertil Ohlin; Interregional and International Trade. Cambridge, Harvard University Press. 1933-xvii, 617 pp.
Sub Title	
Author	岩田, 仞
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.3 (1935. 3) ,p.451(133)- 457(139)
JaLC DOI	10.14991/001.19350301-0133
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350301-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

最後の章に於て、スノーデンは自己の政治的生涯を回顧し、政界に志す青年に忠告を與へ、社會狀勢の變遷を回想し、社會主義に對する見解と労働黨を論じて居る。今日の労働黨は其組織當時のものとは異なる。其は他の政黨の性質と殆ど異なる所のないものになつて居る。又労働黨が近い將來に於て再び大なる勢力を獲得するものとは信じない。不賢明なる指導と誤れる政治的判斷とは其進歩を妨げて居る。しかしスノーデンは、保守黨政府の繼續を想像するが、遠き將來については労働黨の社會主義的綱領に従て社會改造の行はるべきことを信じて居るのである。吾人は此自叙傳を以て近代政治家の最も重要な記録の一であると思ふ。近代英國の社會主義運動、労働黨發展の内外の狀勢を語り、幾多の危機を含む政治事情の變遷を敘述して居る。彼は労働黨の五大領袖の一人であり、又労働黨最大の財政家である。其記録は財政史の資料としても貴重なる意義あるものと考へるのである。

オーリン著「地域貿易と國際貿易」

— Bertil Ohlin; Interregional and International Trade. Cambridge, Harvard University Press. 1933—xvii, 617 pp. —

岩 田 仞

著者オーリンは既に幾多の勞作を發表して居るが、本書に於て國際貿易を全面的に取扱ひ、彼の貿易理論に對する態度を明瞭ならしめた。彼は特に二つの思想から著しい影響を受けて居る。一つは比較生産費説を修正發展せしめんとする Tausig, Viner 等のハーバード學派であり、他の一つは價值無用論を主張する Cassel を中心とするストックホルム學派である。彼の貿易理論に於て前者は消極的役割を、後者は積極的役割をそれら演じて居る。従つて本書の内容も亦その一部分は國際貿易に關する正統學派理論の修正、批判であり、一部分はそれと異なる新しき分野を開拓せんとする試み、即ち國際分業論と平衡價格論とに基礎を置いた貿易理論の體系づけである。彼は比較生産費説に對しては全く否定的態度をとる。彼に依れば、古典派労働價值説は次の如き二つの非現實的な假定を必要とする。(一)如何なる種類の労働に於ても、労働量と賃銀の比率は一定である。(二)如何なる財貨生産に於ても労働と資本の割合は同一である。従つて労働價值説は一市場内の價格形成の理論として適當ではない。

若し然りとすれば労働價值説に基礎を置く比較生産費説も亦當然各市場間の價格形成理論の基礎として適當であらう筈はない。即ち一國內に於ける貨幣條件に於ける生産費に影響を及ぼす労働量以外の諸要素の存在が當然國際貿易にも影響を與へるからして、生産費を價格費用ではなくして眞實費用で計量し、然も眞實費用を労働量のみで示す比較生産費説は國際價格現象に充分な説明を與へ得ない。かくて彼はリカード以後の論者がなせる眞實費用(労働量)の使用が國際貿易現象の説明の上に不必要な混亂を引起し、眞實ならざる假定を以て分析を行ふ結果疑はしき結論に到達する事を指適する。(pp. 571-590)

此の點は正統學派貿易理論に最も忠實なハーバート學派の人々も亦認める所である。併し乍ら Tausig, Viner 等は、眞實費用のみに依つて説明する比較生産費説は之を拒絶するが、眞實費用と關聯せしめた他の様式に於ける比較生産費説の再建(價格費用に依る修正)の可能性を信じ、且つ又その必要を主張するのである。然るにオーリンは彼等が比較生産費説を何等かの方法で修正發展せしめんとするかゝる努力をも非難する。筆者が本誌先月號で示した如く比較生産費説と眞實費用が不可分の關係にある以上、右の如き比較生産費説を修正發展せしむべきか、又は之を放棄すべきかの見解の差異は、眞實費用に依る貿易の利益の説明、即ち自由貿易政策の論據を國際貿易理論に於て示す必要があるか否かに依つて生ずる。此の點に付き著者オーリンをして語らしむれば、「我々が貿易政策を決定する際に古典學派理論の根底に横はる眞實費用の如きものを考へる必要があると云ふ主張は、古典學派理論を辯護する人々に依つて屢々なされた所である。即ち價格費用の條件ではなく眞實費用の條件に於ける分析のみ政策の基礎たり得るものであると云ふ。此の主張に對しては次の如く答へるべきである。「努力と犠牲」及びそれに類する概念は、理論を政策の問題に適用する時のみ考慮に入れるだけで充分である。政策上の問題と、單なる

現象の客觀的分析とを混同する事は、理論の明白性を失はしむる。自由貿易が望ましいか、保護貿易が望ましいかは特殊な論題の下に於て考究し、事實の客觀的分析に於ては何等此の問題に觸れるべきではない。…若し或る論者の云ふ如く眞實費用が價格費用と常に比例するならば、價格費用の條件に依る理論を打ち立て、政策の問題が論議される時のみ之を眞實費用の條件に還元する事は可能である。併し乍ら若し眞實費用が價格費用に比例しないならば、眞實費用の概念が貿易と價格の問題の研究に對して有効な手段であるとすは理解し難い所である。」(p. 590) かくてオーリンは貿易理論が労働價值説—比較生産費説に基礎を置くべきであると云ふ必要を何等認めない。ストックホルムの巨星グスタフ・カッセルが價值に關する從來の無用の努力を指適して、直ちに價格と之を支配する諸原因との説明から出發した如く、彼オーリンも亦國際貿易理論を眞實費用と關聯せしめんとする無用の努力を指適して、國際價格と之を支配する諸原因の説明から出發する。彼曰く、「貿易發生の直接的原因は或る商品が貨幣條件に於て一國で生産されるよりも他國に於てより安價に得られる事である。…従つて根本的な問題は、かゝる價格差の脊後に隠れた原因を説明する事であり、如何にして價格費用の差異が發生するかを解決する事である。」(pp. 12-13)

然らば彼の價格理論上の立場は如何なるものであるかと云へば、彼は、カッセルの生産要素の稀少性と需要條件に基く平衡價格の説明をそのまま受入れる。彼はそれを單に單一市場のみならず一國內の地域貿易に、そして更に國際貿易にまで擴張適用する。(pp. 554-562) 即ち彼の貿易理論の基礎の一つはカッセルの價格構成機構論の上に置かれて居る。

彼は先づ、生産要素がその内部に於ては自由に移動し、その外部に於ては移動が困難な region (地域) なる概

念を假定する。本書第一部は此の地域貿易の説明、即ちかかる地域の存在が如何に價格並びに生産に影響を與へるかの説明に始まる。此處では從來多くの論者が攻撃した所の古典學派の國內貿易と國際貿易の根本的區別は塗抹され、一國內であらうと異國間であらうと、たゞ右の如き地域内貿易と地域間貿易の區別に置き換へられて居る。

彼に依れば此の一地域内の價格は商品に對する需要と、その商品の生産の可能性に依つて決定せられると云ふ。更に需要は(1)消費者の需要と欲望と(2)個人の收入従つて需要に影響を及ぼす所の生産要素所有の條件に依つて、供給は(3)生産要素の供給と(4)生産の自然的條件に依つて各々規定される。(p. 14) 従つて各地域間に於て之等の四要素間の關係が異つて居るならば、各商品の相對的價格の差異が生じて地域間の貿易が発生するに至る。各地域間の價格構成機構の性質は孤立地域内のそれと本質上何等異なる所は無いが、兩者は價格形成過程に於てやゝ異つてくる。即ち生産要素に對する全需要は國內消費の爲めの生産のみならず、輸出の爲めの生産からも生じ、國內消費の一部は輸入品に對しても向けられる。従つて貿易の性質は、生産要素の供給又は各需要に對して供給の有する相對的稀少性のみならず各地域間の相互需要に依つても決定せられる。(p. 22)

かかる見解は正統學派のそれと大いに趣を異にして居る。正統學派の論者は貿易發生の根本原因を比較生産費説に依つて説明し、勞働生産力の比較的差異(供給の要素)に之を求め、たゞ貿易が實際に行はれる際の交換比率決定に於て始めて相互需要の法則を適用する。貿易發生の説明に於て需要の要素はあくまで第二義的の意義を持つに過ぎない。然るにオーリンは供給と並んで需要に對しても同等の重要性を與へる。併し「大まかに云へば、各地域に於て豊富な生産要素は相對的に安價であり、欠乏せる生産要素は相對的に高價である。その生産に前者を多く後者を少く必要とする商品は、それと反對の割合で生産要素を要求する商品と交換に輸出される。かくて間接に供

給の豊富な生産要素を含む商品は輸出され、供給の欠乏せる生産要素を含む商品は輸入される。」(p. 92) 即ち嚴密に云へば需要條件の作用も重要ではあるが、貿易發生の基礎の一つは生産要素の各地域に於ける配分とその價格の關係の上に置かれて居る。各地域の生産要素の性質と利用の差異が各種産業の地方的分業を決定し、地域貿易を刺激する。之は分業に關する古典派理論に外ならない。オーリンの貿易理論の基礎の一つが國際分業論に置かれて居ると述べたのは此の意味である。

各地域間(國際間)に生産要素の移動が困難であり、従つて生ずる差異が分業を起さしめ地域間(國際間)に貿易を發生せしめる事は、古典學派の論者と意見を同じくするが、その場合輸出商品は、正統學派の論者にとつては價格費用に於ける比較的利益を有する商品であり、オーリンにとつては生産要素の結合に於て、貨幣條件に於ける生産費が最も安價なる商品である。然も前者の價格費用は勞働量の大小にのみ比例して決定せられるに反し、後者の結合される生産要素の價格は供給の稀少性と需要の條件に依つて決定せられる。あくまで前者は供給側のみ要因を求め、後者は供給と需要の双方に之を求める。オーリン曰く、「簡単に云へば、高價な生産要素の大なる割合を含む商品は輸入され、安價の生産要素の大なる割合を含む商品は輸出される。併しかく推論する際に我々は一つの事を念頭に置かねばならない。A地域に於てB地域に於けるよりも一つの生産要素がより安價であるか、又はより高價であるかは、兩地域の通貨間の交換比率が決定せられて居る時にのみ云ひ得るのである。その場合爲替相場は相互需要の條件に依存する。即ち全地域に於ける價格の基本的條件に依存する。…従つて價格機構を構成する總ての基本的要素の考慮なくしては、地域貿易の説明は適當になし得ない。」と(p. 29)

右の如き地域貿易の概念の上に立つて、彼は國際貿易の分析を行ふのである。「國家は各種の地域中最も重要な

ものであり、従つて國際貿易理論は一般地域貿易理論の主要なる適用である。何故なれば生産要素の移動に關する最も重要な境界は國境であつて、疑もなく各國内に於ける移動は國際間の移動よりも遙かに大である。従つて第一部でなせる推論(地域貿易の説明)は、國際間の貿易の研究の基礎となる。併し乍ら地域貿易の説明は極端に單純な假定の上に立つて居る以上、當然重要な修正なくしては適用し得ない。(p. 67) かくて彼は單純な場合より複雑な場合へと分析の歩を進める。

第二部に於ては主として國際貿易の特殊性に關して次の如き問題を取扱ふ。(一)特殊な地域としての國家の基本的條件の特質は何であるか、特に第一部でなせる地域貿易の理論を國際貿易に適用する爲めには、供給要素を如何に修正すべきかの問題、(二)國際貿易の性質、影響を支配する諸事情は、地域貿易の如く單純ではなく多方面に亘り複雑である事、特に(1)異國間の生産要素の質的差異、(2)全く異なる生産技術使用の可能性、(3)大規模生産の利益、(4)企業の堅實性と課税、(5)消費財の變化等に關する説明、(三)國際貿易、生産要素の供給、商品に對する需要が互に作用反作用しあふ事に依る現象の複雑化等の問題である。

第一部及び第二部に於ては、地域或ひは國境が商品移動の何等障害とならず、單に生産要素の移動の障壁となると云ふ假定の上に論ぜられた。併し現實には國境は商品の自由移動をも阻止する。従つて地域貿易の理論をより現實に近付かしめる爲めに、彼は第三部に於て地域間(國際間)の商品移動の困難に關する考察を行ふ。その最も重要な原因として運送費、關税の問題を取扱ひ、又地域間の生産要素の移動とその商品移動への影響を分析する。更に進んで國內に於ける運送費及び其他の生産要素移動の障害を考慮に入れた一般的地方化理論の説明をも與へる。

第四部、第五部に於ては以上の如き分析に基礎を置いて、國際貿易のより具體的な問題に進み、議論はグンペン、輸入税、資本勞働の移動とその國民收入への影響、生産要素の移動と價格等に及んで居る。特に第五部に於て國際貿易が地域貿易の特殊形態として最も特徴的である國際收支調節機構と國際價格の爲めに費されて居る。その説明に際して彼が古典派理論に於て與へられた國際間の金移動の支配的役割を拒否して、國際短期資本に重要性を與へた事は注目すべきである。

以上の如き本書の内容は最近の各國に於ける數多くの具體的資料に依つて形られ、屢々抜目のない觀察と推論が見出される。彼の古典派理論の批判に於て幾多の首肯し得べき點があるが、彼が試みんとした新しき貿易理論體系は、未だ充分に現實の貿易現象を説明し得たものとは云ひ得ない。彼がその理論的根據に依つてより深く探らうと試みなかつた事は遺憾である。

併し正統學派とその分析の過程、方法に於て非常に異つた分野を開拓した點に於て、又興味ある資料が集められて居る點に於て、讀者が裨益せられる所は少くないであらう。(一九三五—二一九)稿